あの夏の日に逢えるまで

気仙沼市立小原木中学校三年　千葉

船のエンジン音で、朝の夢から目覚める。外を見渡せば、東の空は黄金色に染まり、海はいたって穏やかだ。いつもの朝である。

僕が住む小原木地区は、海岸沿いに浜で働く人たちの作業場や、そこに住む人たちの家が街並みを創り、その背後は山。のどかな漁村という感じの地域である。

春先から豊かな緑に覆われ、浜にはたくさんの船がいる。暑い夏の日には、セミの鳴き声に誘われるように海へ行く。魚を釣り、飽きれば泳ぐ。疲れると日陰に行き木の葉の揺れる音を聞きながら心地よく眠る。夏休みともなればこれが僕の日常生活で、永遠に続くものだと思っていた。しかし、それはあの悪夢によって儚く打ち砕かれた。

平成二十三年三月十一日。午後三時四十六分だ。僕たちは、次の日の卒業式に備え、皆校内の清掃や準備をしていた。地鳴りと共に、いきなり地面が波打つ程の大きな地震。目の前にあった保健室の壁が崩れ始めた。あちこちから物の落ちる音割れる音が響いてくる。

この大地震と巨大大津波、それに福島の原発事故は、日本中を恐怖のどん底に落とし込んだ、史上最悪の大惨事だった。

このとき、僕は「もう死ぬのか？」「まだ死にたくない。」「もっと生きたい。」との思いで、必死に恐怖に耐えていた。やがて揺れも小さくなり、皆校庭の中央に集まった。家族は大丈夫だろうか？」口には出さなかったがこのことが頭から離れなくなった。僕の家は何とか無事であったが、帰っても父母や姉はいなかった。

その晩、祖父母と不安な夜を過ごしていた。その頃気仙沼は夜空が赤く染まる程大き

な火災が発生していた。無口でいた祖父がふと口を開いた。「お父さんは覚悟しろよ。場所が場所だからな。」と、ポツリと言った。一瞬、ワアーと泣きたくなるのを耐えた。

父は商港にある油の輸送所で働いていたのだ。母一日、姉は二日置いて無事に帰った。だが、父の消息は全くわからなかった。それに、気仙沼がどうなっているのか情報が入ってこない。そのうちに、「アイツ（父のこと）は絶対に大丈夫だ。」とか「あそこは火事になったからなあ……」と言う人がいた。でも、こんな言葉はますます僕の不安を募らせるばかりで、父が生きているという保障はなかった。

三月十四日、震災三日後。避難所にいた僕は、気晴らしに散歩に出かけた。その途中、姉が泣きながら父に抱きついている光景が見えた。思わず僕は父のそばに駆け寄った。「お父さんは無事だったんだ。」「生きていたんだ。」今までの心配と不安、このときの喜びと感動が一気に涙に変わった。

父が帰って来たその日から、僕の心にはある一つの漠然とした目標が見えた。「ここまで派手に荒らされたなら、震災前より街全体と明るく輝かせようじゃないか！」

僕たちには無限の時間と生命力という資本がある。そこに目標の可能性を見るのだ。それには、まず、「感謝」の気持ちを行動に移すことから始める。

今まで小原木中学校には、日本各地、世界各国からたくさんの支援物資、励ましの手紙やメールが届いている。その度に僕たちは、感謝を込めて返信している。今でもやり取りをしている学校もある。このようなかかわりをこれからも大切にしていきたい。

今現在、復旧・復興は思うように進んではいない。しかし、僕たちも街全体を立派に立て直し、懐かしい故郷を取り戻す責任と使命を感じる。そこで自分は何ができるか何を第一になすべきかを行動に移しながら目標実現に向けて邁進していきたい。僕は諦めない。必ず街を輝かしてみせる。故郷の美しい自然を取り戻し、あの夏の日に逢えるまで……。